

自然・人間関係の社会的構図

—— トーテミズムを素材として ——

田中 宏

我々は自然の中で生きている。現在ではこのことは自明のこととして受け取られているが、その実質的な内実は必ずしも明らかにされてはいない。そこで本稿は、まず「未開社会」のトーテミズムをめぐるレヴィ＝ブリュル、レヴィ＝ストロース、フォーテスの議論の検討・総合を通じて、トーテミズムの中に自然と人間の社会的関係の構図を探ることとする。次に、トーテミズムの検討から得られた成果をより一般的な社会的文脈の中に位置づけ、普遍化することを試みる。

はじめに

環境問題や資源問題という形で自然が人類にとって切実な問題であることが、また自然からの大規模な「搾取」に依存している現代文明が危機に瀕していることが、久しく叫ばれてきた。しかしこの声高な叫び、危機意識の高まりに比して、現実には十年一日の如く歩み続けている。こうした現実の力強さを前に、もう自然の問題はうんざりしたと感じている人々もいるかもしれない。だが、こうした現実の頑とした歩みこそ問題の本質を明かしている。問題が技術的対策などではどうしようもないほどに深いところに根ざし、現代社会の存立の根幹に関わっているからこそ現実の歩みは簡単には変わりようがなく、このことの感取が問題に対する無力感に、ひいては無意味感にまでつながっていく。しかしこうした状況でこそ、我々は、自然と人間との関係そのものという根本的なところまで遡ってもう一度問題を再考する必要があるのではないだろうか。

ところで、自然との関係はすべての生物の生

存にとり決定的な問題であるから、自然と人間の関係も生物的問題の一例とすることも可能かもしれない。しかし言うまでもなく、他の生物の問題とは異なり、現在の問題がよってきたところは社会的レベルでの人間の自然に対する関係の在り方にある。社会的レベルでの自然との関係を通じて、生物的存在としての人間の存在が脅かされるに至っている。生物的レベルと社会的レベルの間でねじれが生じ、その歪みが前者で現れていると言うこともできよう。こうした状況に合わせた生物種としての人類の進化は望めそうにないから、社会的なレベルにおけるこれまでの関係の在り方の転換がどうしても必要である。人間と自然の関係についての問い直しは、すぐれて社会学的な検討を要請している。

この問題は大きな問題であるから様々な角度からのアプローチが可能だろうが、ここでは、人間にあっては人々と自然との関係は生物的レベルを越えたレベル＝社会的レベルで処理され、あるいは構成されているという前提から、この

言明をさらに明確なものとするべく、それを構成している自然と人間と社会の連関の骨格を明らかにし、自然と人間の社会的関係の展開とはいかなるものなのか、その基礎的構図を引き出すことを試みる。このような生物学的レベルを越えたレベルで自然と人々の関係を処理し構成するという働きを司っているものを指示する最も包括的な用語として精神という語を採用することにすれば、精神の作動という面から自然と人間の関係の展開を見てみようというのである⁽¹⁾。問題系としてはさらに、この基礎的な構図の中身を具体的に埋め、そこから現代における自然と人間の関係をどのように理解することができるのか、ということへと通じているものであるが、本稿の射程範囲は構図の描出に限定される。

1. トーテミズムの世界：融即の関係と分類の関係

(1) 素材としてのトーテミズム

本稿の課題を基礎的構図の描出としたが、基礎的とはいっても具体的な素材なしに描き出すことは難しい。そこでここでは素材としていわゆる未開社会、特にトーテミズムをめぐる議論を取り上げたい。現代社会と未開社会とでは余りに隔たりすぎているように思われ、こうした素材の選択にはとまどいを感じられるかもしれない。しかし、未開であれ現代であれ人間は自然の中で社会的に生きているのであるから、むしろ自然との関係が我々の社会よりもはるかに可視的である社会を検討の素材として用いる方が基礎的構図の剔出という課題には有利なのである。また、このような一見異質の社会に目を向けておくことは、逆に我々の社会の特異性を照射しかえすことに今後役立って行くものと期待してよいであろう。さらに、ここで特にトー

テミズムをめぐる議論を素材とすることは次の二つの理由による。第一に、トーテミズムをどのように解するのであれ、トーテミズムは自然と人間との関係について言及しているものであるから、そこに未開社会で作動している人間と自然の関係の処理・構成の機制を見出すことができるからである⁽²⁾。第二に、あらかじめ述べておくと、トーテミズムに関する議論としては一見対立しあっている議論が、自然と人間との関係の社会的な処理・構成とそれを支える自然・人間・社会の連関という本稿の視点から見たとき、相互に補い合うことで、人間と自然との社会的な関係のもつ複合的な様相を我々に提示してくれるからである。トーテミズムをめぐる諸議論の検討を介して自然と人間との社会的な関係の複合的な様相へと接近することができるのである。

以下ではまず、このトーテミズムをめぐる議論の対立の両極から始めることとしよう。それはトーテミズムを知的・論理的な精神とは全く異質で非合理的なものの産物と見るか、知的なものとするか、という対立である。この節では前者の端的な例としてのレヴィ＝ブリュルの議論と、後者の代表であるレヴィ＝ストロースの議論を素描し、検討する。その結果は、我々の視点からすれば、両者は決して対立していないことが明らかとなるだろう。次いで後続する諸節で、両者がどのように一つの全体像へと結実していくかを検討し、そのことを通じて自然と人間と社会の連関の基礎的構図を描き出すことを試みることにする。

(2) レヴィ＝ブリュル：融即の関係としてのトーテミズム

最初に、レヴィ＝ブリュルがトーテミズムにおける自然と人間との関係をどのようなものとし

て把握していたのかをとりあげよう。しかし、この問題は未開人の「精神」(レヴィ=ブリュルの用語では「原始心性」)についてのレヴィ=ブリュルのより一般的な議論と不可分に結びついているので、我々はこの点から始めなければならない。

未開人の「精神」についてレヴィ=ブリュルは、集団表象論の立場から、「精神」は当該社会の構造によって決定される集団表象によって方位づけられて作用しているのであるから、集団表象が異なれば「精神」の作用も異なる、しかるに現代社会と未開社会とでは社会構造が、従って集団表象が異なるのだから、未開人の「精神」は現代人の「論理的精神」とは異なった様式で作用する、と論じる。そのため世界と向かい合ったとき、未開人の「精神」は、それを構成している諸々の対象そのもの、「客観的な事実」からなる地平へと方位づけられるのではなく、対象が内包し、対象の間で働きあって世界を満たしているような神秘的力・威力からなる神秘的地平へと方位づけられている、とされる。未開人の「精神」にとって問題なのは、対象を物質的で客観的な実在として把握することではなく、対象が内包し、対象から発して対象の間に満ち、対象の間で働いている神秘的な力の作用を感じ、自らもその力と交通することである、とレヴィ=ブリュルは言う [Lévy-Bruhl 1910=1953: 上74]。このような神秘的地平へと方位づけられた「精神」の作用を特徴づけるものとされているのが「融即」である。

融即とは「現代人の純粋な知覚表象」においては判然と区別されている諸表象あるいはそれらが開示する諸々の事物や生物の間の神秘的な合一である。レヴィ=ブリュルによれば、未開人にとっては表象とそれが開示する実在の事物との区別がなされておらず、表象こそが現実そ

のものに見なされているため⁽³⁾、表象同士が神秘的に合一化することは実在の世界を構成している諸事物間の神秘的合一でもある。先に述べたように、対象そのものよりそれらを越えて作用している神秘的力こそが問題なのであるから、この力の作用の下で個々の対象は互いに溶け合い融合するものと見られている。レヴィ=ブリュルは、この合一化作用を、論理的な矛盾律や因果律がそこでは意味をもたない前論理的な法則であるとして、融即律と呼んでいる。レヴィ=ブリュル自身は融即について次のように述べている。

「原始」心性の集団表象においては、器物、生物、現象は、我々に理解しがたい仕方により、それ自身であると同時にまたそれ以外のものでもあり得る。また同じく理解しがたい仕方によって、それらのものは自ら存在するところにいることを止めることなく、他に感ぜしめる神秘的な力、効果、性質、作用を発し或いはそれを受ける。

換言すれば、この心性にとっては一と多、同と異等の対立は、一方を肯定する場合、他を否定する必然を含まない。この対立は二次的な興味しかない。時としてそれは知覚される。また知覚されないことも多い。それは、我々の思考では不合理とならずしては混同できない諸存在の間の本質の神秘的共通性の前では全く消滅することが多い」[同、上95]。

こうした未開人の「精神」にとっては、人間と人間の、また人間と世界の関係も融即律の支配の下にある。レヴィ=ブリュルの目から見ると、トーテミズムとは、このような「精神」による人間と自然との間の関係の社会的な処理・構成の現れなのである。「社会集団の存在そのものは、成員の存在との関係からは、多く融即として、同体として、或いはむしろ諸々の融即と同体との複合叢として表象される」[同、上

113]。「各々の個人は現在生きているそれぞれの男女であると同時に、神話時代に生活した人或いは半人類の祖先でもあり、同時に自らのトーテムでもある」[同]。そして個人、祖先、トーテムは「三つでありながら一つでしかない」[同、上115]。「この心性にとって、トーテム集団に属する成員、トーテム集団そのもの、トーテムの動植物或いは器物はすべて同じものである。「同じ」というこの言葉は我々の論理の同一律の法則によってではなく融即の法則によって理解してもらわねばならない」[同、下32]。従って、トーテムと自らの同一性を主張するトーテム集団の成員は、融即によってトーテムと同一化しており、実在としての両者の区別は「精神」の世界から剥落してしまっている。つまり、人間と自然との関係の社会的な処理において、ある人々同士の、また人間と自然との関係が同一化によって処理されることで、それらの関係の社会的構成においては、物質的な実在としての区別はイレリヴァントなものとされている、とみなされるのである。

以上のレヴィ＝ブリュルの議論を次のようにまとめることもできよう。人間にとって世界は、物質的な実在の世界と「精神」によって処理・構成されている世界とからなる。実在の世界は相互に判明に区切られ区別される存在、物質的に相互に不連続的な存在からなる。「精神」の世界は実在の世界についての表象からなる。融即律の下にある未開人の「精神」の世界では、表象同士は同一化しているものとして処理され、その結果、人間同士、人間と自然とが一体となった世界が構成されている。この表象同士が同一化し離れがたく結びついているという意味で、「精神」の世界は連続的な世界を形成している。そしてこの実在同士の相互の区別が溶融している世界が未開人にとっては世界そのものである。

従って、このような「精神」を介して自然の中で生きる人間にとっては自然は自然として客観化されず、従って自然から区別された文化というものも客観化されず、人々は「自然の到るところに融即を感じた、自然に融即する自己を感じて、むしろ自然を生活している」[同、上161]、とすることができる。

このようにまとめてみると、逆に、未開人の「精神」を論じているレヴィ＝ブリュルの、つまりは未開人に対比された現代人の『精神』の在り方がはっきりと現れてくる。それは、80年たった今でも現代人にとって支配的な『精神』の在り方である。この『精神』が処理し構成している世界では、表象は物質的な実在の相互の物質的な区別を再生産し、互いに判明に区切られている。表象は実在の世界を物質的に区切っている境界線を自らを区切る境界線とし、お互いに交わることがない、換言すれば、実在の世界を構成している物質的存在という単位と『精神』の世界を構成している表象という単位とは同延的である。この意味で、未開人の「精神」の世界と対比すると、この『精神』の世界は実在の世界同様不連続的である。このような『精神』に立脚しているからこそ、レヴィ＝ブリュルにとっては、或る人間の自らについての表象は物質的に区別される当の人間と同延的であるのが当然のことであり、当の人間が同時に祖先であり動物でもあるなどという表象は「神秘的」としか形容のしようがなかったのである。

このように「精神」と『精神』とは全く異質の相貌を呈しているが、我々の目的にとって大切なのは、この「精神」と『精神』が、社会との関係においては同じ位置を占めるものであることを改めて確認しておくことである。「精神」の在り方（方位づけ）が未開社会の構造によるものであるように、レヴィ＝ブリュルの議論を

一貫させるならば、『精神』の在り方は現代社会の構造によっている。これを我々の課題設定に基づいて言い換えると、人々が自然の中で社会を形成して生きている、そのことが人々の「精神」(『精神』)の在り方を形作るのであり、その社会の形成における様態の相違が「精神」と『精神』の在り方の相違として屈折してくる、つまり、その在り方の相違を別にすれば「精神」と『精神』は社会との間に同型的な位置を占めているのである。

(3)レヴィ=ストロース：分類と秩序化としてのトーテミズム

次に、トーテミズムを知的なものとして描き出すレヴィ=ストロースの議論を素描し、レヴィ=ストロースがトーテミズムの中にどのような精神の働きを見出したのか、自然と人間の関係のどのような処理・構成を見出したのか、ということをもとめてみよう⁽⁴⁾。

一言で言えば、レヴィ=ストロースにとってのトーテミズムとは、自然と人間の間で作動している精神、分類し秩序づけるという論理的な〈精神〉の具現である。レヴィ=ストロースによれば、トーテミズムが存する未開社会において、社会を構成している基本的集団である諸氏族が、それぞれ特定の動植物や事物をトーテムとし自らの名前としているという事態は、トーテムと各人と集団が神秘的に同一化するように自然と人間との関係が社会的に処理・構成されているという事態を表現しているのではなく、社会を構成する人々を分類し組織することで社会を秩序づけ体系化することを目指した知的〈精神〉の作動の未開社会における様態なのである。つまり、トーテムとは、何をトーテムとしているかによって人々を、社会の中で分化した氏族集団を、相互に区別するための指標でし

がなく、なぜそれが動植物等に求められたかという、人々・集団を相互に判明に区別する単位(体系化のための単位)が「感覚に直接与えられるもの(感覚与件)のレベル」[Lévi-Strauss 1962b=1976:16]に求められたからである。すなわち、相互に判明に区別される動植物種という自然の分類体系のための単位を社会の体系化のための単位としても用いたからなのである。

しかし、指標としてであれ、ある動植物種が特定の集団と結びつくのは何故か、そこには当該の集団の成員とトーテムとの特殊な親和性に基づく相同性が前提とされていたのではないか、という問題が残っている。レヴィ=ストロースに先立ってトーテミズムを分類の問題として捉えていたデュルケームやモースは、分類の原理をこのようなトーテムと氏族集団の相同性に求めていたのであった([Durkheim 1912], [Durkheim=Mauss 1903])。だがこのような見方は、レヴィ=ストロースからすれば近視眼的である。特定の集団とトーテムとの関係だけしか見ていないからこのように見えてしまう。しかし、問題が社会の体系化であってみれば、トーテムをなしている自然の全体と社会の全体とがまとめて視野におさめられねばならない。このような全体的な視座をとるところから——これだけで十分というわけではないが——レヴィ=ストロースに独自の見解が引き出されてくる。トーテミズムとは、異なる種からなる自然と異なる集団からなる社会という二つの系列の間の相同性を、つまり自然の側に存する差異の体系と社会の側に存する差異の体系という二つの体系の間の相同性を基盤とする、ということが開示されるのである。換言すれば、トーテミズムとは、自然が持つ種の間での差異と社会をなす集団の間の差異が、双方とも差異であるというそ

の資格においては同じものであるから、この差異に関しての相同性に基づいて、自然の中に存する差異を集団の間の差異へと転換する機制、あるいは自然の中に存する差異を集団の間の差異の表現として社会の中に移植していく機制として把握されるのである。トーテムである動植物はそのものとしては問題なのではない。トーテムは、人々の間の集団帰属に関する差異——これは、親族関係がすべての社会で同一ではないことに示されているように社会的に導入されている差異であり、この差異は生得的な身体的差異としては表現されていない——を社会的に判然と表現するべく、動植物種が持っている差異を社会的に利用するための道具なのである。このような道具の使用によって、未開社会は現に存在しているような社会として形成されている。

以上のように、レヴィ＝ストロースは未開人の〈精神〉の論理的な作動を剔抉し、一見神秘的なものに見えるトーテミズムの世界も知的に秩序化されたものであることを開示する。ここでは〈精神〉は、社会を自然との関係において組織するものとして、すなわち実際の体系化された社会を実現するコードとして働いていることから、この〈精神〉＝コードはトーテミズムという形を取っている、ということになる。そこでは、繰り返しになるが、自然と人間との関係は、自然が有する種の間の一連の差異と社会が人々の中に導入する一連の差異との間の相同性として処理され、全体として二つの差異の体系間に相同性という関係が構成されるのである。

(4) 「精神」対〈精神〉から「精神」と〈精神〉へ

我々はレヴィ＝ブリュルとレヴィ＝ストロースの議論の素描のそれぞれを、対立軸の両極として始めたのであった。これまでの短い記述で充分伝えられたかどうか覚束ないが、この点での争いに関する限りでは、前者の議論は後者の議論に比べて表面的な事象に囚われた素朴なものである、という印象を免れえないであろう。だが、この印象は単純に双方の優劣ということにかかわるだけではなく、双方が実際には対立軸の両極として同一の次元に属しているのではない、ということによっている。両者が展開している次元の相違から深淺という印象が由来しているのである。この議論の次元の相違は何によるのか。それは、議論の対象そのもの、つまりトーテミズムにおける自然と人間の関係が持っている異なった位相に対応している。この点をもう一度確認しよう。

レヴィ＝ブリュルが融即として論じたトーテミズムは、集合表象により方位づけられているとはいえ、個々人において働いている「精神」の問題であった。それは個々人による自らと集団とトーテムとの間の関係の処理・構成の問題であった。この個々人の「精神」の在り方、つまり自然と人間の関係の処理・構成の様態は、社会の形成の結果であり、その社会形成の様態が個々人の「精神」にいわば屈折したものである。

これに対してレヴィ＝ストロースが示してみせたのは、この個々人の「精神」に屈折してくる社会を形成するコードとしてのトーテミズムであった。そこで作動している〈精神〉は、個々人に準拠していたのでは見えてこないのであり⁽⁵⁾、レヴィ＝ストロースのように、自然との関係の中にある社会を全体として見据えたとき初めて開示される。換言すれば、この〈精神〉は、個々人の「精神」のそれぞれにおいて作動しているのが見出されるものではなく、個々人

の「精神」を貫いて個々人を越えたところ、つまり社会的レベルで作動している、あるいはこの意味で社会を担い手としている⁽⁶⁾。

従って、レヴィ=ストロースとレヴィ=ブリュールは、〈精神〉=コードの働きにより体系化された社会(=トーテムを用いた氏族制度、これを制度としてのトーテミズムと呼ぼう)が形成される運動と、この社会形成の様態に対応した「精神」を個々人のレベルにおいて結実してくる運動とからなる複合的な全体について、異なる位相に照準を合わせ、それぞれの位相での自然と人間との関係の社会的な処理・構成を論じたのだ、とすることができる。本稿にとって問題なのは、これらの位相のいずれかを選択的に論ずることではない。この複合的な全体そのものを自然との関係という場面において把握することである。つまり、〈精神〉による社会形成と「精神」の結実との連結、〈精神〉と「精神」のそれぞれにおける自然と人間の関係の処理・構成の連結が把握されねばならないのである。「精神」は〈精神〉の作動を通じて結実してくるのであるから、この複合的な全体において主動的であるのは〈精神〉=コードである。そこでこの複合的な全体の理解のために、次節でまず、主動的なものである〈精神〉=コードに目を向け、その作動の機制を明らかにしてみよう。次いで、節を改めて、そのような機制による〈精神〉の作動に対して個々人の「精神」の結実がどのように連結しているのかを検討していこう。それによって我々は、複合的な全体に迫ることができるのである。

2. コードとしてのトーテミズムの位置・対象と作動

(1) コードの位置と対象

コードの作動の機制を明らかにするためには、

まず、コードがどこで何を対象に作動しているのかを明確にする必要がある。前節のレヴィ=ストロースの議論の素描においては、コードとしてのトーテミズムは自然と人間との間に位置づけられていたが、その対象については専ら社会の組織という面が表に出されていた。そこでここでは、自然もまた組織の対象であることを強調しておかねばならない。トーテミズムは、社会を組織するために、自然を構成している要素についてそのシニフィアンを社会へと転用した、という一方向的なものではない。自然を構成している要素をトーテムとして用いるということは、逆に自然を構成している要素をトーテムとして社会的に組織するということでもある。もはや自然は種々様々なものが変転万化する一大パノラマではなく、社会的に意味づけられ区別されるもの(或る動物はもはや動物そのものではなく、トーテムであり、別の動物は別のトーテムである)から構成されるテキストである。トーテムは自然を構成する要素を社会的に分類し組織する道具としても働いているのである⁽⁷⁾。

さらに、コードの対象が自然と社会(人々)との間にまたがっているということは、単に社会を組織するという試みの副産物として帰結するのではない。それは、コードそのものの成立に起因している。この点に触れているのが次のレヴィ=ストロースの発言である。「社会構造と分類範疇体系との間に弁証法的関係が存在することは疑問の余地がない……、それらはどちらもめんどろな相互調整の作業を経た上で、両者共通の基層である人間と世界との関係の歴史的地理的なある様態を表示するものなのである」[Lévi-Strauss 1962b=1976:257]。レヴィ=ストロース自身はこの点でこれ以上議論を展開していないが、この言明に関して氏族からな

る社会構造を示すとともに自然を分類・組織するものでもあるトーテミズムは例外をなしているとする理由はあるまい。この言明を適用すれば、コードとしてのトーテミズムもまた自然と人々との間に成立している関係を基層とし、二つの体系間の相同性ということから窺われるように、自然と社会をいわばお互いの鏡として利用し、相互に適合するように調整しながら双方を組織していくのであり、その結果が制度としてのトーテミズムという次元での自然と社会の組織である、とみなされねばならない。またそうであれば、組織の方法であるコードもまた、少なくともその具体的な在り方に関しては、この関係の中から作り出されてくる、ということでもある。コードとしてのトーテミズムは、自然と人間との関係の中から作り出されるとともに、その関係を制度としてのトーテミズムへと組織することで表現しているのである。

このように、コードがそもそも自然と人々との関係という基層から作り出され、その関係を組織する一環として社会を組織していくものであるからこそ、コードは自然と人々との間に位置し、双方を組織の対象とすることとなる。我々にとっての問題である複合的全体は、この自然と人々との関係の中からコードを生み出し、その関係を組織していく運動として理解されねばならないのである。

(2)コードの作動の機制

次に、このような位置と対象をもつコードがどのように作動して自然と人間の間を組織し、制度としてのトーテミズムという次元での社会と自然を実現していくのが明らかにされねばならない。それにより、主動的部分であるコードを軸とした複合的全体の像に我々は接近することができるのである。しかしこのためにはま

ず、コードの対象である基層の性格が明らかにされねばならない。

この基層の性格について、レヴィ＝ストロースは次のように考えていた。「人間は、まず、自分がすべての同類（その中に、ルソーがはっきり言っているように、動物もいれねばならない）と同一であると感ずるから、そののちに、自分を区別し、これら同類を相互に区別する能力、つまり種の多様性を社会的分化の概念的支柱とする能力を獲得することになるのだ」

[Lévi-Strauss 1962a=1970:165]。コードに先行する基層においては、人々や自然は区別されず、同類であり同一であると感じられている、というのである。ここで「同一」ということが、 $A=A$ というようないかなる違いもない完全な意味での同一性を意味するものではないことは言をまつまい。問題なのは、人々や自然の間の差異にもかかわらず、その差異によって人々や自然を区別することなく統合し統一している一体性である。人々や自然が、物質的存在としてのお互いの区別が意味をなさない仕方の一つの全体へと包摂されており、人々がこの一体的全体性の作用の下に置かれていること、このことをレヴィ＝ストロースは「同一であると感じる」と表現したものと解されるのである。この一体性がいかなるものであるかについては後に再び取り上げることとなるが、ここで重要なことは、個々の物質的存在同士の間がイレリヴァントな一体性、この意味で連続的な世界として、基層としての関係が成立していることであり、この連続的世界が組織の対象である、ということである。

この連続的世界に対してコードは、それを組織するためにそれにとってはイレリヴァントなものである区別された物質的存在へと照準を合わせ、その区別を用いて組織を実現する。既に、

トーテミズムというコードが自然を組織する際に、自然を構成する個々の要素＝物質的存在を組織するものであることを確認したが、社会の組織に当たっても同様である。先のレヴィ＝ストロースの議論の素描では、トーテムという道具により区別されるのは集団であったが、区別される集団が存在するのは、具体的な個人がそれぞれの集団へと帰属させられていくからである。従って、コードの作動は、トーテムという道具を自然や社会を構成するそれぞれの個体、物質的に相互に区別される存在（物質的存在）へと適用し、それらの物質的存在を社会的な空間の中で配列・分類する、という形で行われている。1. (3)で素描された二つの差異の体系間の相同性という、全体のレベルでコードが構成している自然と社会の関係は、物質的存在をコードが配列していくパターンとして現れてくる。個々の物質的存在は、このパターンに基づいて、それぞれが占めるべき位置へと割り振られるのである（例えば、aという人間はAという集団へと割り振られる）。

従って、コードの作動の機制を次のようにまとめることができる。コードは、物質的存在同士の区別がイレリヴァントなものである連続的な世界（基層としての自然と人々との関係）から生み出され、それを制度としてのトーテミズムの世界、判然と区別された集団や自然種からなる世界、この意味で不連続的な世界へと組織していく、という運動の線上に位置づけられた。しかし、このような位置にあるコードは、その実際の作動に際しては同時にもう一つの線上に位置している。連続的世界である関係の組織に際し、それにとってはイレリヴァントなものである物質的存在の地平へと照準を合わせ、物質的存在をトーテムと連結することで社会的に編成していくという線上である（ここには、物

質的存在としての人間をトーテムと連結するという面と、自然を構成する物質的存在をトーテムとする、すなわちトーテムと結合するという両面がある）。それ故、コードが関係の中から調整を通じて形成されつつそこにおいて作動する場合、それはこの二つの線の紡ぎ合わせの中から形成されつつその紡ぎ合わせとして作動している。つまり、この二つの線の紡ぎ合わせの中から、関係を組織するための物質的存在の配列パターンとして二つの差異の体系間の相同性というコードによる関係の処理・構成のパターンが紡ぎ出されてくるのであり、また、このパターンに基づいて物質的存在が配列・編成されることで、自然と人間との社会的関係が制度としてのトーテミズムのレベルでの自然と人間の組織、集団やトーテムという社会的に区別される単位への組織として織り出されていくのである。

3. コード＝〈精神〉の作動と「精神」の形成：フォーテスのトーテミズム論

このようなコード＝〈精神〉の作動をふまえたうえで、次に問われねばならないのは、個人々の「精神」の結実がこの〈精神〉の作動とどのように連結しているのか、ということである。本節では、この連結を検討し、それを通じて「精神」の在り方の理解を試みることにする。この点で注目されるのがフォーテス [1966] のトーテミズム論である。

我々は既にコードとしてのトーテミズムによる社会の組織化については検討しておいたが、フォーテスによれば、そのようなコードによるいわば外部からの人々の区別・集団帰属の同定だけでは、実際の組織された社会の実現には不十分である。社会の実現のためには、それに相応した行為が調達されねばならず、そのことは

行為者自身が自らを同定し、社会的に配分されている地位、役割、権利、義務等を自らのものとして受入れることで初めて可能となる。つまり、行為者が自らについての意識（「自己意識」）、認識（「自己認識」）を持つことが不可欠である [Fortes 1966=1987:122] ⁽⁸⁾。そのためには、行為者にとり外的に指示されるとともに行為者が内的なものともせねばならぬ「自己」——このような「自己」を社会的存在と呼ぼう——を、行為者に対して客観的に提示し、それに対する行為者のコミットメントを保証する文化的な装置が必要である。フォーテスにとってのトーテムイズムとは、この文化的装置の全体である。ここではこの文化的装置の全体は扱わず、トーテムの使用が果たしている機能を文化的装置としての側面から見ることで、そこから〈精神〉と「精神」の関連を明らかにしてみたい ⁽⁹⁾。

トーテムは、全体としての社会の組織というレベルに照準すれば、示差的な機能を引き受ける道具であった。しかし、これによって差異化されるそれぞれの人々の側から見れば、トーテムは他の人とは異なる集団への自らの帰属を示す指標として機能する。それは社会内部での集団帰属という視点からみた場合に、人々が占めるべき位置（地位・役割・権利・義務等の束からなる）を人々に社会的に表示する道具である。このトーテムによっていわば外部から指示されている社会的な位置こそ、氏族関係が決定的重要性を持つ未開社会にあっては、人々が自らのものとしなければならない社会的な存在としての「自己」である ⁽¹⁰⁾。従って、人々がそのトーテムを自らのものとして受入れ、それによって自らの社会的な位置を受入れ、それが示す自らの位置に基づいて行為を方向づけて行くということは、トーテムの内化を通じて特定の集団への帰属を承認しつつその集団の成員としての役

割等からなる「自己」を獲得することである。個々人のレベルでは、個々人にトーテムとして提示される客観的で人間外的なもの（＝自然）が人間の内部での心理学的な投錨点として用いられ [同、131]、社会的存在としての「自己」の構想の焦点、「自己認識」の核として機能しているのである。

このように、個々人が社会的存在としての「自己」を「認識」するのは、各人にとってのトーテムである外部の、物質的には判明に区別される客観的存在との関係の中においてである ⁽¹¹⁾。つまり、物質的に外部から判然と区別される存在である人間（物質的な存在としての自己、あるいは身体としての自己）は、物質的存在としての動植物との関係の中で、物質的存在としての自己を越えて社会的存在としての「自己」、集団への帰属性へと到るのである。この「自己」を担っているのは、個々の物質的存在としては相互に区別されている存在、この意味で不連続的な存在であり、さらにはその「精神」である。この「精神」の中に定位された「自己」は、現代人の『精神』からすれば、物質的存在としての自己と同延的であるべきものであるが、その獲得の過程、「自己」形成の過程から見れば、トーテムと物質的存在としての自己との関係を通じた社会集団への物質的存在としての自己の帰属という形で成立している複合的なものである。つまり、「自己」とはその内実においては、トーテムと物質的存在としての自己と集団との関係性・一体性として実現しており、区別された項を用いた表現を用いれば、「自己+（トーテム＝自然）+集団」として表現される。これは、レヴィ＝ブリュルが表現したように、三つのものにして同時に一つのものという、物質的存在としての境界を乗り越えた連続的な世界である。ただし、このことは未開人には物質

的存在同士の違いがつかないとか、融即律の支配下での神秘的合一などというのではなく、「自己」の内実をなしている関係性の表現、「自己」形成の過程の結果の側からする縮約的表現なのである⁽¹²⁾。

以上の点を〈精神〉と「精神」の連結という点から整理し直してみると、先述のように〈精神〉が二つの線の上で展開していることの帰結として「精神」が形成され作動していることが明らかになる。コードである〈精神〉は、(a)基層としての自然と人々との関係という連続的な世界の組織を、(b)物質的存在の配列・編成として実現する。この配列の操作によって社会が組織されると言ってもよいのだが、それが実効性を発揮するのは、配列の操作によって特定の動植物＝トーテムとの関係の中に置かれ、社会的存在を指示された個々人が、その社会的存在としての「自己」を内化し自らのものとして引受け、それに相応しい行為を行う場合である。物質的存在へとコードが照準する((b))ことでコードの作動の対象として用いられる個々人が、コードの組織の働き((a))を個々人の「精神」において、自らが配列される位置の「認識」とそれに対するコミットメントという形で引受け、初めて、コードの作動は実効的なものとなる。ここで、自然と人間の関係の処理・構成の舞台が〈精神〉から「精神」へと移動する。この「精神」において再びトーテムが、ただし異なる仕方道具として用いられる。個々人は、トーテムやトーテムを介した他の人々との関係によって社会的存在を指定されるのであるから、「精神」はトーテムを焦点として用いることで自らと他の人々との関係を把握し、コードによって指定される位置＝社会的存在を把握する。従って、「精神」にとって問題なのは、個々の物質的存在そのものではなく、トーテムとの関係、

それを介した他の人々との関係である。「精神」は物質的存在そのものではなく、「精神」の担い手とその回りにコードがパターンに従って配列している他の物質的存在との関係＝社会的関係へと志向する。この個々人の「精神」における個々人の位置に応じた限定的な関係への志向が、「自己」＝「自己＋(トーテム＝自然)＋集団」という三位一体的な表現として帰結する。個々の物質的存在の区別を越えて成立している一つの関係性へと志向し、物質的存在間の区別がイレリヴァントなものとして化しているという意味で、「精神」は配列された物質的存在を一体的に処理し、それらに連続的な関係を構成していくのである。

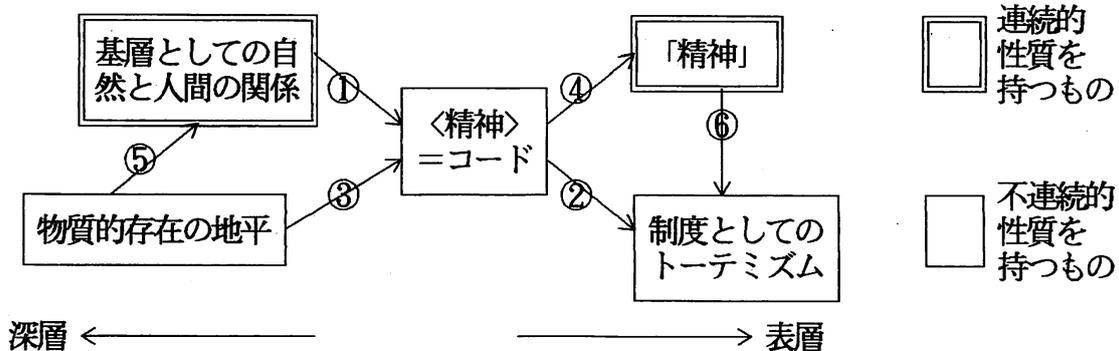
以上のように、個々人の「精神」の在り方、自然と人間の関係の処理・構成の様態は、コード＝〈精神〉が二つの線上で作動し、自然と人間関係を物質的存在の配列・編成として処理・構成していくことの帰結であるとともに、コード＝〈精神〉の作動が実効的なものとして実現されるための不可欠の一環をなしている。自然と人間関係という一体的な全体は、コード＝〈精神〉の作動によって個々人の「精神」へと舞台を移し、そこにおける自然と人間関係の処理・構成という問題へと変換されることを介して、全体としてはコードの配列パターンに応じた制度としてのトーテミズムの次元での社会や自然へと組織されていくのである。

4. 自然と人間の社会的関係の基礎的構図

(1)基礎的構図の描出

これまでの議論で、我々はトーテミズムについての議論から引き出された自然と人間の社会的関係の展開を構成している複合的全体の運動についてひとつお話しを行ってきた。そこでそれらの全体を一つにまとめて整理することで、

図：トーテミズムにおける自然と人間の社会的関係の基礎的構図



トーテミズムにまつわる自然と人間の社会的関係の全体について、その構図を描き出すことができる。その結果は、図のような構図としてまとめられる。

これまでの議論を振り返って見ると、自然と人間の社会的関係はコードにおいて紡ぎ合わされた二つの線で展開していた。一方は、コードによる区別が作用する以前の、先に述べたような連続性を特徴とする自然と人間の関係という基層からのコードの形成 (①)、そのコードによる制度としてのトーテミズムへの組織、すなわち相互に判然と区別されるトーテムとしての自然や諸集団への組織 (②)、という線である。もう一方は、コードが関係の組織のために物質的存在の地平へと照準し、物質的存在を汲み上げ利用し (③)、コードの配列パターンに応じた「精神」を個々人において醸成する (④)、という線である。この二つの線は実際には切り離しうるものではない。基層の関係が制度としてのトーテミズムを帰結したのは、その関係を組織するコードが物質的存在の地平へと定位するからであったし、また他方では、「精神」を規定する物質的存在の配列のパターンは基層における自然と人間の関係を前提とし、それとの調整を通じて作り出されるものであったからで

ある。また、双方の線はそれらの両端においても結び付いている。基層としての関係が成立するのは物質的存在から、それらの区別を乗り越えてであるし (⑤)、「精神」によって規定された個々人の行為によって実際の制度としてのトーテミズムは実現する (⑥) からである。また、この図は別の読み方も可能である。③→②という線を取り出してみると、それはコードによる物質的存在の配列・分類の結果としての制度としてのトーテミズムの形成を示すものであり、①→④という線は、基層としての関係のコードによる組織が個々人の「精神」へと屈折することを、あるいは基層としての関係がコードの配列パターンに応じて個々人の「精神」へと変換されていく過程を示すものである。

以上のように、一口に自然と人間の社会的関係といっても、それは異なったレベルの間で展開している諸々の運動の複合体として成立していること、現実存在する社会や人々もこの展開の中で形成されつつ、その展開を担っていること、そしてそれは図示されたような構図で展開していること、が明らかとなった。だが、ここで次のような疑問が当然出てくるだろう。すなわち、ここで提示された自然と人間との複合的関係そのものは一体なんなのか、それはトー

テミズムをもつ未開社会という特定の社会に固有の関係なのではないか、他の社会にもこの構図を適用することができるのか、と。もちろん、図の個々のブロックの具体的な在り方（コードの配列パターン、「精神」の在り方、制度としてのトーテミズム）はトーテミズムに独特のものである。問題は、具体的な内容が展開している複合的運動の骨格＝構図がトーテミズム以外にも妥当するのか、ということである。

(2) 構図の位置づけ：「生産」の展開としての自然と人間の関係

この問題にとって重要なことは、もう一度トーテミズムというコードが作動している場＝自然と人間の関係の基層を捉え直すことである。既に我々は、その場を自然と人間の区別以前のな一体的関係、その意味で連続的世界として把握した。ここではさらに、この連続的世界がどこに成立しているのか、ということが問題となる（この点が明らかになれば、②、④、⑥については改めて論じる必要はない。それは、コードの組織による社会組織の過程の骨組みとしては、人間の社会が生理的に保証されたものではないので、社会一般に妥当する）。この位置づけは、トーテミズムという形をとって現れているものは何か、と問うことである。それがすべての社会に存するものであり、トーテミズムがその現れであるならば、トーテミズムから引き出された構図はトーテミズムの背後にある普遍的なものの展開を示すものとして他の社会にも適用可能と考えられる。

まず、基層としての自然と人間の関係＝連続的世界は、「未開」と言われる人々にのみ集合的に備わっている神秘的な一体感、人々の観念の中で成立している一体感のようなものである、と考えてみよう。このように解する場合には、

この一体的関係を、我々には理解しようのない仕方で存在している与件として受け取るしかない。トーテミズムはこの不可解な観念の産物ということになり、この観念の展開としてコードが、また制度としてのトーテミズムが生み出された、という一種のヘーゲル主義を帰結する。もし、この観念的な一体性が集合的に存在するという前提を受け入れ、この観念の運動とその地上での組織である制度としてのトーテミズムという解釈を取るならば、それはそれなりに一貫したものではあるが、その場合我々は再び「融即」、あるいはそれ以上に神秘的な見方に戻ることとなる。

これに対して、このような基層が一般にすべての社会に共通して存在するものである、と考えることはできないだろうか。それは可能であるし、この基層の存在こそ現代の危機が痛烈に思い知らせていることである。それは生命の維持のための自然との実践的關係というレベルで成立する一体性である。

人間の場合、生命維持の活動は集合的に行われる。この集合的な自己保存活動を「生産」と呼べば、「生産」において自然と人間の間のようにして一体的な関係が成立する。「生産」において人々は、「生産」の能力（いわゆる生産力）に応じて外界の物質的存在の様態についての情報を把握し、それに基づいて外界に適当な方法で働き掛ける。この働き掛けをその方法の側面で捉えれば、それは情報的な事象であるから、これを外界への情報の流れとみなすことができる。さらにこの働き掛けは外界の新たな状態を帰結し、そのことが新たに外界の情報をもたらす。さらにこのことは外界への新たな働き掛けを結果し、そのことがさらに……というように継起する。このように、情報のレベルに定位すれば、自然と人間の間には全体としてみ

たとき情報の連鎖が成立し、一つの閉じた円環（あるいは螺旋）を形成している。この円環の在り方は、それを構成している情報の在り方に応じて変化していくのであり、自己修正的なサイバネティックなループをなしている。ベイトソンは、情報がこのような円環を形成しているとき、それを「精神の単位」と呼んだが、この用語を借りれば、ここにも「精神の単位」が成立しているのである（「精神の単位」という用語は一般的なものであるが、本稿では、この基層としての自然と人間の関係というレベルのみこの語をあてる）⁽¹³⁾。この「精神の単位」という情報的レベルでは、個々の物質的存在を区別する境界線はイレリヴァントなものであり、個々の物質的存在は情報の流れを担うターミナルでしかない [Bateson 1972:251]。逆に言えば、個々の物質的存在は「精神の単位」を担いよう存在であるよう、全体としての「精神の単位」の作用の下におかれ、その担い手となることによって「精神の単位」を形成する。つまり、個々の物質的存在という区別を越え、それがここではイレリヴァントなところで一つの単位＝一体性が形成される（ただし、物質的存在という区別が言われるのは観察者の視点からであり、当事者がまず物質的区別を把握して、さらにそれを乗り越えていく、というようなものではない）。

このように、我々は全ての社会に共通して成立している一体性を「生産」において見出すことができる。それは、自らの在り方（物質的存在のレベルでの区別を持ち込んだ表現をすると、自然と人々の関係）を自ら処理・構成していく統一体である。従って、我々はコードが組織するのはこの「精神の単位」の在り方であり、コードによる関係の処理・構成は、「精神の単位」が持っている処理・構成を社会的に翻訳したも

のではないかと考えることができるのである。

(3)生産関係としてのトーテミズム

ここで我々が到達した点は、生産ではなく「生産」という用語を用いていることと関わっている。「精神の単位」が関係の処理・構成を行っているということは、「生産」において関係の構成・処理が行われているということであり、「生産」が集散的に遂行されるものである限り、そこには既に人々を組織するコードが働いていなければならない、ということになる。しかし、この「生産」のコードは、直接顕現するものとはかぎらない。つまり、通常我々が呼んでいるような生産、経済的なものである生産という一つの自律的で自立的な制度を構成するわけではない。特に経済人類学によって指摘されてきたように、むしろこのような事態こそ例外的である（例えば、ゴドリエ Godelier [1984]）。「生産」において働いているコードは、現実の社会では、生産のコードとして明示的に働くのではなく、表面的には他の制度を実現しているコードのもとで潜勢的に機能している、言葉を変えれば他の制度を実現しているコードへと吸収・変換されて機能している。そのために、生産という自律的・自立的な制度が構成されていないのである。

従って、コードとしてのトーテミズムは「生産」における即自的なコード、社会が存在している時には常に既に作動していなければならないが直接顕現しているわけではないコードを変換したものなのかどうか問われねばならないし、このことに肯定的に答えられれば、事後的にはあるが、トーテミズムを「生産」というすべての社会に存在する自然と人間の関係から展開しているものとみなすことの妥当性が保証（少なくとも補強）されることとなる。

この点についての我々の答えは肯定的なものである。というのも、トーテミズムによって組織されている氏族集団からなる社会にあっては、氏族集団として組織される親族関係は決定的に重要なものであり⁽¹⁴⁾、それは「生産」の遂行に際しても、人々をまとめていくものだからである。つまり、それは我々が考えるような家族の単なる規模の拡大、延長なのではなく、「生産諸関係として機能する」[Godelier 1966=1968: 93] のである。従って、コードとしてのトーテミズムは、「生産」において人々を組織しているコードを親族関係としての人々の組織というコードへと吸収・変換して同時に担っているのだ、ということができるのである。

従って、トーテミズムから描き出された構図は、自然と人間の実践的な関係の中から生み出されたコードがこの関係を社会的に顕在的に組織していく過程の展開として、一般にすべての社会に適用される、と言ってよいだろう。この「生産」を基底とした自然と人間の関係の処理・構成は、議論を通じて明確になったように、「生産」において成立している「精神の単位」＝「自然+社会(人々)」という一つの全体が即自的に有している処理・構成の様態が、社会を担い手とするコード＝〈精神〉へと変換され、それを介してさらに個人々人を担い手とする「精神」へと変換されていく、という形で遂行されている。我々は生物的レベルをこえた関係の処理・構成の機構を精神と呼んでみたが、それは通常我々が想起するように個人的なものではなく、それを一部とし、「精神の単位」→〈精神〉→「精神」という舞台の移動の中で変換されながら展開しているものなのである。

最後に、既に気付かれているだろうが、自然と人間の社会的関係の展開として帰結した組織された社会・自然は、組織された集団や自然種

という区分された単位＝不連続的なものとしてのみ存在しているわけではないこと、先に基層としての関係として述べたものが、そこでの即自的コードの社会的展開の結果として、これらの単位間の関係という形で成立しているのであり、この関係そのものに定位すれば、それは一つの情報的な統一体＝連続的世界をなしていること、このことを強調しておこう。先に述べた自然と人間の関係の展開は、時間的な継起として展開しているのではなく、垂直的な展開であり、そこで示された五つのブロックは常にともに作動しているのである。

5. 現代社会にむけて

以上で、本稿の所期の課題は達成したわけであるが、最後に結語に代えて現代社会への展望に簡単に触れておきたい。

現代社会とトーテミズムとを比較した場合に最も目につく特徴は、既にレヴィ＝ブリュルについて述べたように、前者では『精神』が不連続的に世界を処理・構成していたのに対して、後者では「精神」が連続的な処理・構成を行っていたことである。このことは、前節の最後で述べたところをふまえるならば、次のようなことを意味する。すなわち、トーテミズムの展開しているところでは、組織された自然と社会の関係として成立している連続的關係が、その内部で生きる人々によっても同時に生きられている、ということである。人々の「精神」においても、社会・自然を組織している単位＝構成要素の境界線が乗り越えられ、それらの間に關係に照準が合わせられている。レヴィ＝ブリュルは、未開人は自然を生きている、といったが、むしろ我々の議論からすれば、「精神の単位」を生きている、とすることができるだろう(ただし、集団間、自然種間の区別は行われている

のであり、完全な連続性というわけではない)。これに対して、現代社会では、人々は区別の側に専ら照準を合わせ、不連続的という性格に優位を与えてきた、とあってよい。このことが、ベイトソンの言う「人間の本性と人間の環境に対する関係の本性についての慣習的な（しかし誤った）考え」[Bateson 1972:488] (15) を帰結している。現代社会の人間は、自然と人間との関係という一体的・連続的な世界を不連続的に生きてきた、と言っているのである。人間にとって自然は、外部の切り離されたもの、いかようにも支配してよい対象であった。現在、このことの誤りが危機を通じて痛感されている。

従って、問題なのはこのような誤りがなぜ生じたのか、ということである。我々の目から見れば未開社会は奇異なものに写る。しかし、歴史的に見れば、本当に特異なのは我々現代社会の方である。この現代社会に特異な誤りのよってきたところは、これまでの議論から、「生産」を組織するコード＝〈精神〉、それによる「精神」の形成の様態に求められる。トーテムを用いた二つの差異体系の相同性という配列パターンが未開人の「精神」を帰結した。それ故、現代社会の自然と人間の社会的関係を再考していく場合、現代社会の生産におけるコードがどのような道具を用いてどのような配列を行っているのか、比喩的に言えば、現代社会の人々や自然にとっての「トーテム」は何か、それらはどのように自然と人間を編成していくのか、が問われていかねばならないだろう。

註

(1) このように本稿は精神一般を問題とするものではない。社会的レベルで自然と人間の関係がいかなるものとされているか、そのような関係を規定し構成している働きを精神の働きとみなし、その限

りでのみ問題としている。なお、社会的ということが示すように、人間と自然の関係と言っても、一人の人間と外的自然という関係が問題なのではなく、人間と自然との関係が人間と人間との関係を同時に前提としたものであることに注意しておいていただきたい。

- (2) つまり、本稿ではトーテミズムが宗教なのか、また外婚的な社会制度をその不可欠の構成要素とするのか、といった問題にはかかわらない。本稿での問題は、トーテミズムそのものではなく、そこに開示されている関係性の構図なのである。
- (3) 原始人の表象は「純粋な表象ではないので、原始人は対象の心像を現在的に持ち、それを実在と信ずる」[Lévy-Bruhl 1910=1953: 上 46]。「彼らに示される事物がどんなものであっても、それはその物と不可分な神秘的作用力を含んでいる、そして原始人の精神はそれを知覚するとき、実際、それらの作用力をその事物から離すことはない」[同、上 53-54]。従って、原始人にとっては「この種の神秘力より以上に自然なものは何一つない」[同、上 163]。
- (4) ここでレヴィ＝ストロースのトーテミズム批判の問題[Lévi-Strauss 1962a, 1962b] が想起されるかもしれない。ここでその批判の内容を紹介している余裕はないが、本稿はその課題設定に基づき、トーテミズムを自然と人間の関係の社会的な処理・構成機制として扱うものであるから、レヴィ＝ストロースの批判の対象となるものではなく、ここで対抗措置を講ずる必要はない。
- (5) アフリカのタレンシ族についてのフォーテスの記述によると、タレンシ族のインフォーマントにとってはトーテムの種の間の変異が意味をもつという考えは決して起こらず、氏族やリネージュとトーテムとのつながりを示す類似性が強調される[Fortes 1966=1987:133] ということであり、個々人は〈精神〉の働きを「精神」においては経験していない、

と言ってよい。

(6)社会を担い手とした〈精神〉によって現実の社会が形成されるということは、社会の自己組織過程として理解されなければならない。本稿の範囲ではこの問題にまで踏み込むことはできないが、悪しき循環論でないことについては同じように社会と呼ばれていても、双方が存在論的な性格を異にすることを明記しておくことで充分だろう。

(7)「トーテミズムはその一面からすると、人々を自然的対象……に従って氏族に類別したものであるが、別の面からいえば、社会集団に従って自然的対象を類別したものである」[Durkheim=Mauss 1903=1980:21]。

(8)ここでの「自己意識」、「自己認識」は、ギデンズの言う「実践的意識 practical consciousness」のレベルで成立していれば充分なのであり、通常我々が考えるような「言説的意識 discursive consciousness」のレベルでの「自己意識」、「自己認識」である必要はない（ギデンズ Giddens [1979] 参照）。

(9)フォーテスの文化的装置としてのトーテミズム分析の中心は、タブー、殊にトーテムである動物を食べることに対するタブーの問題であるが、この問題はトーテミズムとは何かということをめぐり、本稿の範囲を越える問題を含んでいること、また、ここではタブーそのものを扱わなくとも、文化的装置としてのトーテミズムの中でトーテムが果たしている機能（この機能をさらに支えているのがタブーであると考えられる）そのものについては論じること、といった理由から、ここではタブーの問題には触れずにトーテムの使用が果たしている機能とその帰結だけを論ずる。

(10)フォーテスが研究したアフリカのタレンシ族においては、父系の親族関係が、各人が他者との関係において担うべき役割や各人の権利・義務を指定する、ということである。

(11)但し注意しておかねばならないのは、この関係が実際の動植物との現実の関係である必要はなく、動植物の観念との観念的な関係で充分であることである（この点については、エヴァンス=プリチャード Evans-Prichard [1956] の議論を参照されたし）。しかし、観念的とはいっても、そこで観念されているトーテムは、人間外部の存在で現実の物質的存在と同様判明に区分されたものとして観念されている必要がある。

(12)レヴィ=ブリュルは、1. (2)で述べたような現代人の『精神』を、集団表象論という自らの立場に反して相対化していないため、関係性についての表現を物質的な存在についての表現と混同してしまっただけである。

(13)「精神の単位」という用語は、自然と人間の全体としての関係だけではなく、情報のサイバネティックな円環が成立している場合、その広がりにかかわらず一般に適用される。例えば、ナイサー Neisser [1976] の「知覚循環」は個々人の知覚のレベルで「精神の単位」が成立していることを示すものであるし、ユクスキュルたち [Uexküll=Kriszat 1934] の「環境世界」説は、生物の刺激-反応を外界との間の機能環として構成するものであるが、この機能環も「精神の単位」の一例である。ここで「精神の単位」という語を採用するのは、実際に自然と人間の間で「精神の単位」が成立しているからだけでなく（ベイトソン自身が、エコシステム、「人間+コンピュータ+環境」、「有機体+環境」に「精神の単位」の成立を見ていた [Bateson 1972:483]）、実際この用語が適用される基層としての自然と人間の関係において関係の処理・構成が行われており、生物レベルを越えた関係の処理・構成の機構を精神とみなすとした我々の出発点に相応するものだからである。

(14)「親族諸関係は、諸個人の土地と生産物にたいする諸権利、かれらが他人のために労働する義務、

学校の義務を規定している。それはまた同時に、政治的、宗教的な事柄についての、ある人の他の人にたいする権威を規定している。……親族諸関係が社会的生活を支配している」[Godelier 1966=1968:92-93]。

(15)ベイトソンは、この誤った考えとして次のようなものをあげている。(a)我々は環境に対峙している。(b)我々は他の人々に対峙している。(c)

問題なのは個人(ないしは個別の会社、個別の国家)である。(d)我々は環境に対して一方的なコントロールを持つことができる。我々はそのコントロールを追求して努力しなければならない。(e)我々は無限に拡張していく「フロンティア」の内に住んでいる。(f)経済的に決定を行っていくのは常識である。(g)テクノロジーは我々のためになるだろう [Bateson 1972:492]。

文献

Bateson, G. 1972 *Steps to an Ecology of Mind*, Ballantine Books

Durkheim, E. 1912 *Les Formes élémentaires de la Vie religieuse* =1941-1942 古野清人訳『宗教生活の原初形態 上・下』(岩波書店)

Durkheim, E.=Mauss, M. 1903 "De quelques formes primitives de classification," *L'Année sociologique*, vol.6 =1980 小関藤一郎訳「分類の若干の未開形態について」、同編訳『分類の未開形態』(法政大学出版局) 所収

Evans-Pritchard, E. E. 1956 *Nuer Religion*, Clarendon Press =1982 向井元子訳『ヌアー族の宗教』(岩波書店)

Fortes, M. 1966 "Totem and Taboo," *Proceedings of Royal Anthropological Institute*, 5-22 =1987 *Religion, Morality and the Person: Essays on Tallensi religion*, Cambridge University Press, ch.5

Giddens, A. 1979 *Central Problems in Social Theory : Action, structure and contradiction in social analysis*, Macmillan Education Ltd

Godelier, M. 1966 "Système, structure et contradiction dans 《 Le Capital 》," *Les Temps modernes*, No.246, Novembre =1968 花崎皋平訳『『資本論』における体系、構造、矛盾』、ジャン・ピイヨン編・北沢方邦他訳『構造主義とは何か』(みすず書房) 所収

----- 1984 *L'idéal et le matériel; Pensée, économies, sociétés*, Fayard =1986 山内稔訳『観念と物質 - 思考・経済・社会』(法政大学出版局)

Lévi-Strauss, C. 1962a *Le totémisme aujourd'hui*, Presses universitaires de France

=1970 仲沢紀雄訳『今日のトーテミズム』(みすず書房)

----- 1962b *La Pensée sauvage*, Librairie Plon =1976 大橋保夫訳『野生の思考』(みすず書房)

Lévy-Bruhl 1910 *Les Fonctions mentales dans les Sociétés inférieures* =1953 山田吉彦訳『未開社会の思惟 上・下』(岩波書店)

Neisser, U. 1976 *Cognition and Reality: Principles and Implications of Cognitive Psychology*, W.H. Freeman and Company =1978 古崎敬・村瀬旻訳『認知の構図 - 人間は現実をどのようにとらえるか』(サイエンス社)

Uexküll, J. von=Kriszat, G. 1934 *Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen. Ein Bilderbuch unsichtbarer Welten*, Sammlung =1973 日高敏高・野田保之訳「動物と人間の環境世界への散歩」、『生物から見た世界』（思索社）所収

(たなか ひろし)

中央公論社

〒104中央区京橋2-8-7
☎03-3563-1431
振替東京2-34

中公新書

表示価格は税込み定価です

好評既刊より

- | | | | | | | | | | | | | |
|------------|------------|-----------------|-----------------------|---------------|----------|--------|-------------------|-----------------|----------------|------------------|----------|--------------------------|
| 1012 | 1009 | 1003 | 1001 | 997 | 995 | 989 | 969 | 961 | 955 | 940 | 930 | 834 |
| メツカ | トルコのもう一つの顔 | 平安朝の母と子 | ラヂイカル・ヒストリー | 日本人の表現力と個性 | 中世のことばと絵 | 儒教とは何か | 日本語に探る
古代信仰 | マヌ法典 | フリーメイソンリー | ミステリーの社会学 | 現代社会学の名著 | モラリストの政治参加 |
| イスラームの都市社会 | | 貴族と庶民の
家族生活史 | ロシア史とイスラム史
のフロンティア | 新しい「私」
の発見 | 絵巻は訴える | | フェティシズムから
神道まで | ヒンドウー教
世界の原型 | その思想、
人物、歴史 | 近代的「気晴らし」
の条件 | | レイシニアン
と現代フランス
知識人 |
| 後藤 明 | 小島剛一 | 服藤早苗 | 山内昌之 | 熊倉千之 | 五味文彦 | 加地伸行 | 土橋 寛 | 渡瀬信之 | 湯浅慎一 | 高橋哲雄 | 杉山光信編 | 杉山光信 |
| 580円 | 620円 | 580円 | 720円 | 540円 | 580円 | 680円 | 560円 | 600円 | 620円 | 680円 | 600円 | 540円 |